

対立的契機に立つ国語教育の方法

井 上 千 冬

まえおき

- 一 言語の本質に見られる対立の諸相
- 二 言語の伝達面に見られる対立の諸相
- 三 文に見られる対立の諸相
- 四 修辞法に見られる対立的発想の諸相

まえおき

学習指導上行き詰まって指導要領をひもどいても大体その抽象的なのに、いつも軽い失望を感じる。試みに昭和36年4月発行の「高等学校学習指導要領解説」の指導事項の欄を見ても、ア「目的に応じて、各種の書物を選んで読み、教養を高める態度を身につけること」とか、ウ「文章を読んで、主題や要旨をつかみ、また、人生や社会の問題について考えを深めること」などの文言が羅列されている。いかにして「教養を高める態度を身につけ」させるか、「人生や社会の問題について考えを深め」させるかといった仕事は、所詮は

現場で埋めてゆかなければならない空白として残されているのである。

国語教育関係の書物に披しても、いつも感じる不満は教授法の形式面ばかりを云々して、何を、内容面で如何に教えるかという核心を避けているという事である。技術面の錬成を軽視するわけではないが、そうした形式的技術は内容面での技術と相俟ってはじめて成果をおさめるはずである。形式的方法論ばかり隆盛するということは、教育界の墮落であるといっても過言でない。近時の国語教育界の不毛性はこゝに淵源しているといわなければならない。多くの優れた現場の教授者が、依然として、実情に即した技術として、芦田恵之介氏の七変化を踏襲し、拠り所としなければならぬ所に、その不毛性は証明される。逆にまた、氏の技術が何故今もってその生命を失わないかという点に思いをひそめると、垣内氏の内容主義的方法論との深い結びつきに思い当たるのである。そうした意味において、現代の国語教育の課題は、垣内氏が解釈学の助けを借りたように、国語学・国文学と深く結びつく事が喫緊の要事である。

以下はこの願いを實現するために、言語の機能と、発想という言語文化の根底に横たわる二つの契機の中に、対立の諸相を発見させ、自覚させるところに、国語教育の拠り所となる指導理念を求めようとする、極めて幼い模索のあとである。

(一) 言語の本質に見られる対立の諸相

言語の本質を言語構成論にとるか、言語過程説にとるかに拘らず、言語の諸側面を種々な対立の相において把握する事が可能である。近時注目をあつめてゐる信号系の問題にしても、言語の営みを第二信号系として事物の刺激である第一信号系と區別して考えられていることも、視点を交えれば、事物と違つて、言語は表象であり概念であるということと同じであつて、言語は事物に非ざるものによつて、事物を写さなければならぬという矛盾と対立を、含んでいることを証明しているといえる。更にはパウロフの第二信号系の研究を基とした子供の文法構造の獲得に関する研究に波多野氏の紹介にしても、子供の言語の発達過程において、第一に獲得された力学的ステレオタイプは、新しいステレオタイプの出現により制限され、分析と総合を通して、刺激条件全体に応じる新しい力学的ステレオタイプの発展に及ぶという指摘の中に、やはり弁証法的対立の姿を見うそのである。

(二) 言語の伝達面に見られる対立の諸相

転じて伝達の面でこのことを考えてみると、そもそも言語表現そのものに微妙な対立のあることに気付く。言語は流通するという点から見ると普遍性をもつ。しかし、表現された言語は概念だけで律しられない、微妙なニュアンスの相異をもち、意味を超えた个性的面貌を示す。そこにソシュールのいう言語(ラング)と言(パロール)と

の対立においてことばをとらえようとする言語観も不可避なものとなる理由があるのであつて、またその矛盾を超克せんとして、時枝氏の音韻と文字を媒介とした行為という微妙な言語観も生まれざるをえなかつたわけがあるのである。ソシュールのパロールというも、時枝氏の行為というも、要するに、伝達という一点に絞つて考えてみると、言語の意味概念としての普遍的な一面と、主体の営みを通して表現された特殊で一回的な言語の一面との対立を超克しようとする努力のあらわれと見る事ができるのである。ちようどこの言語の性質は光の謎に包まれた性格に似ているといえる。光は確かにある場合には物質としての粒子の性質を示すが、またある時には運動としての波と考えなければ説明のつかない性状を示すこともあるのである。前者は言語構成観に立つ立場に似ており、後者は過程説に立つ言語観に似ている。光の対立する性質がエネルギーに両者を選元する事によつて統一されるように、言語観のこの対立も、主体的行動の中に止揚されると思ふのである。前者の言語観が知的な国語教育を説くに反して後者の言語観に立つものが技術に偏した国語教育の必要を説くのも、それら必然性はあるが、しかし言語の反面ずつを説明したものとか考えられない。この対立を超克するためには、一步言語の世界の外に出て、人間主体の反映として言語を見なおす所にきていふと思ふのである。ごく常識的に考えてみても文章なり談話なりが人を感動させるのは、巧みな言語のあやでではなくて、話す、書く主体の誠意如何にかゝっていることをもつてしても、また感極まった末の、言葉にならない言葉が、その身振りや表情が、名状し難い迫力をもつて迫ってくることをもつてしても、言語というものが如何に主体と深くかゝる

っているかが知れようというものだ。その場合言語は、無言や、身振りや、表情や、動作によって、その本来の機能を制約され、否定されることによって、その機能を十全に發揮することができるのである。そこにまた、伝達上における別種の対立の相を見出だすことができる。

さてこゝらへんで言語主体の表現の過程を辿ってみることにしたい。そこにもまた複雑な対立の止揚が見られるのである。

まず、言語主体は相手の理解をつねに前提とすることを俟たないが、そのかぎりにおいて主体は、つねに他によって制約されることになる。逆の観点よりすれば、表現はいつも自己主張を、何らかの形で伴っており、そのかぎりにおいて、言語主体はいつも他を制約し、否定せんとする衝動を内蔵している。この対立は、文体の奥に発想法とか、テーマとか、モティーフとかプロットとかいったものに委身して、深く読み、潜んでおり、そうした内面のメカニズムにまで溯源しえない説明は空疎のそしりを免がれない。

第二に主体と場面の関係の間の対立がある。場面とは文学でいうシチュエーションとは違うのであって、例えば話すにあたって大衆を前にするか、一人を相手にするか、また儼然な式場やか、くだけたテーブル・スピーチか、その場面場面に応じて話し方も変わる。そうした意味での場面なのである。書くに当たっても、親しい友人への手紙と、敬すべき恩師への手紙とは、まったく異なった主体の覚悟があるのである。表現主体はその場面からつねに制約され、激しく対立しているといえる。こうした対立は形式的に固定したものではなくて、相手や場面やあるいは自らの発した言葉自体から絶えず制約されたり、働きかけたりしながら形象をつむぎ出すところ

に表現過程の弁証法的対立の構造があるのである。

読むことの中にこの関係を探ってみると、真の理解を期待するためには、自己を空しくして所与の表現に没入することが肝要である。一旦の無条件の肯定の過程を経て、所与表現に対する疑問や、批判は生まれ、所与表現は否定されるにいたる。その肯定と否定の交互に行なわれる対立をおして、読書において、自己を形成し、確立することができるのである。

次に書くことの中にその関係を探ってみると、書くという現象は決して頭の中に、一糸乱れぬテーマが確立されて、表現が生み出されるのではない。書く過程の内に、思わぬ構想やテーマの改変を幾度も重ねて完成される。書くことと考えることが書く行動の中で否定したり、されたりしながら、発展するところに創作の秘密がある。少しでも書くという経験をもった人なら、考えただけでははつきりしなかったことが闡明されたり、逆にわかったつもりが少しもわかっていなかったということを書くことの過程で見出す。あらゆる認識力の直観的総合である行動一般としての書くことを通じて、人間の理性や悟性や感情や感覚や意志はさまざまな対立の局面を経て止揚され、高められてゆくのである。

さらに聞くという面から考えてみても、よい聞き手は、相手によく話させる人であって、聞くことは単なる静的な状態ではないのである。ということは聞き手は、まず自己を空しくし相手の意見をうけ入れると同時に、建設的な意見で相手と対立する事によって、話を活気ある発展に持ち込むことを意味し、先ほどの読むことに見られる弁証法的対立と同じ関係を発見するのである。しかし聞くこと、話すことはまったく同じ作用・機能とは言えない。聞くことは一に生

身の間との対立であり、又多人数を対象とすることもあるという点で、読むことが、一に、あくまでも、作者と読者の一対一の対立であり、二にあくまでも思惟的の営みであるという点と鋭く対立しているといえる。したがって読むことによつて、主体は、個人的、精神的に高まるけれども、聞くことは社会性の陶冶という、より現実的の側面に大きな力を発揮するといえる。それは生身の話し手に接して、大きな人格的影響をうけて感化されたら、逆に反省させられたりすることによつて可能となるのである。

話すことにおいても書くことと同様、話すという主体的行動により、自己の思想を統一的に把握するという点は相似しているが、話すことは聞くことと同様、社会的な営みである一方、その表現の反応が即時的であり、話し手、聞き手の間に時々刻々、対立を契機とする、発想の訂正や変換が行なわれる点に静止的な書くこととの相違があるのである。

書くこと、読むことは、本質的により多く個人的・断定的・截断的・形式的・思惟的で、聞くこと・話すことは社会的・協調的・流動的・行動的であると言える。時枝氏が言文一致の不可能を説かれるのも、この辺に起因しているのである。ギリシアの哲学者達が弁証という形式を好んで執つた理由も、話し聞くことの妥当性と発展性にあるといえる。しかし読み書くことを軽視しては思想の高揚は望めず、いたずらに外面的に社会に適応する軽薄の人格を形成するおそれがある。読み、書くことにより、高く悟り、話し聞くことによつて、俗に還る真の全人教育こそ肝要である。

要するに、読み、書き、話し、聞く、それぞれの中に対立を契機として主体を弁証法的に高める働きのあると同時に、読み、書くこと、話し、聞くこととの、二種の行動のせめぎあいの中に、調和

ある主体の発展のあることが確かめられるのである。ここに対立を契機とする国語教育の掘つて立つ一つの基点があるのである。

(三) 文に見られる対立の諸相

さきにごとばの中に、普遍の意味概念の面と、主体の意志と場面との有機的対立によつて生まれてくる、個性的表現のニュアンスとの対立を見てきたが、文にも一定の思想を伝達する側面と、発想の差異を前提とする、表現の個性的ニュアンスの対立のあることが指摘される。後者を私は文体と呼びたい。この文体こそ私は国語教育の対象とすべきものだと思ふのである。その点で単なる意味字や、思想の学と、国語教育は鋭く対立するのである。したがって私はこの文体を現前させる力である発想の内面に「まえおき」でいったとおり、種々な対立の契機を見出だすことを、本稿の主目標としたわけである。それはまた後に譲るとして、まず当面は、それ以前の文の叙述そのものの中にメスを加えてみたい。

そこには、言語に見られた普遍性と主体性との対立に相関した対立の相を発見することができる。即ちそれは、江戸時代以来の国語学者の説を敷衍した、文に見られる「詞」と「辞」の対立の現象である。「詞」は、普遍的な意味に対応し、「辞」は、表現者の主体的意志に対応する。この両者の対立の止揚をとおして、入子型の文構造は把握されるのである。これは意味学的国語学、言語構成論に立つ国語学の、文節をとおしての文把握の、形式的・機械的分割方式を完全に破つた意味で刮目すべき仮説といえる。こゝに真に有機的・主体的な文把握の道は切り開かれたのである。この仮説を基として文学の、とくに古典の表現主体に鋭く迫ることが可能となるとともに、生きた文法指導や言葉づかいの指導が可能となるにいたつ

たのである。

一例を挙げるならば、口語助詞の「ノデ」と「カラ」の微妙な相違なども、旧来は見逃がされがちであったが、「ノデ」は補助動詞にだけ接続し、「カラ」は助動詞にだけ接続する。そのことは前者は比較的客観的な相當さの響きをもつに反して、後者は後続の「辞」たる助動詞にひかれて、主観的・高圧的な響きを帯びることと無関係ではありえない。このようにして意味としてはとらえ難い、微妙な言葉のニュアンスまで、先程の仮説に照らして明らかとなる。かくして言葉の生きた指導も旧来の文法では到達不能の世界に、無限に細密化しながら迫ってゆける道は切り開かれたのである。

(四) 修辞法に見られる対立的発想の諸相

言語や、言語表現上にこうした対立の諸相を見てきたのであるが、更に根源的な発想の底にも、また様々の対立的契機を見出さないうわけにはゆかない。

そもそも言語文化にとゞまらず、人類文化全体の底流として、有限なもの、限定されたものとしての主体が、無限なるもの、永遠なるものに徹しく、激しく対決し、あるいは、微妙に触発される姿を見るのである。そして、脆弱な主体がその苦闘のはてに、見事に普遍性と永遠性を獲得した崇高な姿にも接することができるのである。そこに文化遺産に接する喜びもあるのである。しかし、こうした抽象論に、今、時を過ごすことはできない。以下、国語教育の対象とする修辞法の上に、具体的に対立的発想の跡を辿ってみることとする。まずそのことを始めるにあたって、断わっておかなければならないことは、古代文学の発想を問題とするからには、民俗学の

成果がある程度、とり入れないわけにはゆかないことである。枕詞、序、縁語、掛け詞、対句の発生に、鋭い洞察を示し、また、そうした修辞法の間の関連を見出すという困難な仕事に糸口をつけたものは折口氏の他にないわけで、以下の私の作業にも、それを大いに援用させていただくこととする。

折口氏の所説によれば、対句、枕詞、序詞、縁語、掛詞はすべて、神憑きの狂乱にその端を発したものと考えられ、対句・疊詠は、神の啓示に至る、心意のたゆたいにありと説かれる。口から出まかせの文言をくり返しながらか、しだいに核心に近づく方法なので、古代歌謡や祝詞等に見られる混沌たる文言の繰り返しはすべてここに淵源する。これはまた、古代人の心を支配していた、たと一回の呪言では完全な効果を期待できないとする心意、すなわち、直らひ、直びの思想とも無関係ではなかったと思われる。枕詞、序詞、縁語、掛詞は、こうした古代人の神意の核心を求めての模索が、矚目のものを、出まかせに語りつづけるうちに、一つの言葉を契機として、突如、解決されるところに発生の動機をもつと氏は説明される。対句・疊句との大きな相違点を、譬喩の契機を含むか、否かに求められたわけである。その譬喩表現の中で、ほ(秀)の核心に、突如、触れる動機をなすことばが、縁語であり、掛け詞であると説かれるのである。しかし、注意すべきことは、これらの修辞法は、たゞ発生の動機だけでもってその全般を律することはできないということである。氏も対句・疊句の形式的完成を人麻呂に見ておられるが、こうなると、整齊美を求める個人意識に胚胎する、芸術上の価値観が出現するのであって、発生の動機は、しだいに忘れ去られるのが人生の定めである。すべての文化現象は、一

且発生すると、それはフォルムと化し、第二の自然として、フォルムそのものの価値の容認を人間に強いるにいたるのである。枕詞、序、縁語、掛詞もこの例外ではありえない。当初に見られた、祭祀的、信仰的な契機はしだいに失われて、古今集などでは全く異質の、技巧的側面を露わにするにいたるのである。氏自身も後世の自然描写はこの序に見られる「ほ」に照応する、囁目の譬喩表現に起源することを説いておられるのである。そうした配慮を忘れないように心がけながら、個別に、それ／＼の修辭法に見られる対立の契機を追求してゆくことにする。

其の一 枕詞と序詞に見られる対立の諸相

これは相当古い起源をもつもので、人類学的な広い立場からの考察が必要であつて、容易に納得のゆく理解に到達し難いのであるが、先述のとおり折口博士のお考えには傾聴すべきものがあるのである。その説の要旨は、囁目の自然の譬喩表現というも、その自然そのものがアニミズムの観点からとらえられていた点からみれば、当然祭祀の色あいを脱することは許されないのである。つきつめてみれば、祭祀のにわでの神がたりが、序や枕詞の起源であつたわけ、序はそうした神がたりの圧縮されたもの、枕詞はさらにそのの圧縮されたものと見ておられる。古代人には、ある一つの事柄や、土地の事を述べようとすると、必ずそれに関連ある神の叙事詩をまず語らざるをえなかつたのである。したがつて、神がたりが生活の全面を覆つていた間は、序や枕詞に見られる簡略化は生じないはずで、その表現の全体は神がたりで埋められていたに違いない。そうした生活の中にしだいに政治的なものを契機として、現実的なものが割り込んだ時点で、表現の上でも、序詞や、枕詞と、論理的

部分との対立が見られるようになる。祭祀的な論理が、しだいに政治性のもたらす、現実のあらしが吹きすさぶに及んで、影を薄くするにつれて、人々は自己の内面をのぞきこむようになる。そこに抒情の誕生があるわけであるが、その時点で、折口氏指摘のとおり、序は、自然描写へと形を変えてゆく。こうした祭祀的叙事から、個人的抒情に移りゆく過渡期に、万葉における序を位置づけることができるのである。前提が長くなつたが、要するに、序や枕詞を含む叙述の中には、混沌とした、論理以前の論理と、統一ある論理の対立を含む理由がこゝに在るのである。

近代的な個性主義の立場よりすれば、まったく冗舌としか考えられない、序詞や枕詞の中に、文学以前の古代人の信仰に根ざした混沌を予感し、論理にのみ頼りきれなかつた心情の必然性を探索する必要がある、その説解にあつてどうしても重要となるのである。

更にもう一つ考えてみなければならぬことは、枕詞は万葉以後衰亡の一端を辿つたことに比すれば、序詞の方は古今集などに、相当残存して命脈を保ち続けたことである。そこに枕詞と異質なものが存在するのではないかという、割り切れなさが残るのである。先述のように、序は、自然描写が発達し、固着した平安朝にいたつて、なおその機能を、多少の変質は避けられないにしても、保ち続けたのである。そのことは、囁目の自然を、たゆたいのうちにえがく機能とは異質なものをものではないかという疑問をいだかせるに十分である。

其の二 掛詞に見られる対立の相

さて、同じく序といつても、同音の繰返しによるものや、比喩によるものは、平安朝には少なく、掛詞によるものが多いのであつ

て、これは、先程の序の問題と深くつながっている。翻って、詳しく後述するように、和歌は本来、問答に起源をもつ

対詠的なものであるが、奈良朝以後は、旋頭歌にわずかにその名残を見出すに過ぎないで、新しく奈良朝末期に連歌の形で、その伝統は復活するわけである。しかし和歌自体は、依然、二人称への語りかけを失ったわけではなかった。私は平安朝の掛詞や掛詞による序を、こうした和歌の対詠性の内攻して、一首のうち自問自答的に二つの語り口を含むにいたった形と見るのである。こうした伝統的・古代的性格が、時の、趣向を重んずる、主知的傾向に支えられて榮えたといえる。古今集などの、一首中に、漫才や落語に今もって見られる、もじりや洒落・地口を駆使してのかけあいのものを見出すのも、あながち迷妄とはいえない。

其三 縁語に見られる対立の相

序の中にすでに掛詞と縁語の兆を見たのであるが、この二つの修辭法が本當に、技巧的に完成されたのは、平安時代であった。この時代の主知主義が、この縁語という修辭をもきわめて鋭くときざました。もちろん、掛詞に見たと同様の、古代のかけあいの残映がないわけではない。その意味では縁語は掛詞と本質的に対立するものではないのである。

鈴虫のこの糸のかぎりをつくしても

長き夜あかずふるなみだかな

(源氏物語)

「鈴虫」に「鈴」をかけ、「ふる」に「振る」を掛け、兩者をつなぐ「鈴を振る」という、この和歌の着想とは無關係な語り口が、

対立的にうかび上ってくるころは、序に見られる語り口と全く同一とさえいえるのである。しかし、それはあくまでも、古代的なものの屈折した残照であるに過ぎなくて、その内実は、近代的意識に立脚する技巧的觀念に多くを負っていたのである。その点では、掛詞や、枕詞も全く同様の過程を迎るのである。枕詞は、あまり詳しくは述べなかつたが、この時代にはいると、祭祀的混沌は次第に消えて、新しく、「雨ふればかさとり山の」とか「花がたみめならぶ人の」とかいった美しい連想を添える枕詞が出現するのである。また、話の筋をもどすと、大体、「朝露の……けぬべき」とか、「絲による……心細くも」とか「白雪の……思ひきゆ」といった觀念の連合が成立するには、こうした語と語の結合体が一つの文学的フォルムとして固着化し、同時に流通可能なものとなることが前提となっていたるわけで、その機が熟するには、やはり古今集の時点を取らなければならなかつたのである。

要するに、縁語は、主想をなす中心的形象に、それと内的には無關係なフォルムとしての副次的形象を二重写的にモニターして、その兩者の微妙な「もてはやし」の中に、かそけき美を表現しようとした修辭法であつて、そこに近代的ともいえそうな技巧的觀念が見出せるのである。これは池田亀鑑氏のいわれる、平安朝文学に見られる擬近代的な精熟と無關係であるまい。

其の四 対句・疊句に見られる対立の諸相

対句という漢文をすぐ連想する。話は飛躍するが、漢文は日本の名文家といわれる人々ときわめて深い關係があることは疑えない。近代に限ってみても、格調の高い名文は、漢文に造詣の深い人々によってのみ出されたといえる。漱石然り、鷗外、佐藤春夫、永井荷風

然り。近代の名文は漢文の媒介なくしては、考えることができないのである。その原因を探ってみると、漢文には極めて明快なレトリックがあるのであって、彼等はこのレトリックに触発されて、日本語の精髓に迫ることができずに違いない。そしてそのレトリックの大方は、対立的発想に負っているのである。しかし、その対立は単純明快、しかも顕在的である。それに比して、日本文における修辭は極めて複雑、陰微といえる。このことは、和辻氏が「風土」の中でふれられたように、単にモンスーンのとのみ裁断できない、幾多の否定を含みこんだ弁証法的な伝統と環境に培われた、日本人の氣質の複雑さと無関係のものではあるまい。彼等はこうした明快な、文における対立の理法に触発されて、日本文の潜在的な、対立の理性を自覚したのにちがいない。私はかつて、土佐日記中、入京の夜の自邸で、その荒寥ぶりに、あずかつた隣人の非情を恨む箇所等に、相手の至らなさを一方で、覺み重ねるようにきめつけ、他方、自分の一点非のうち所のない美点をつきつける、対比の見事さにと、その対比が逆接の助詞で綴られている所に着目し、土佐日記全体の逆接の数を調査して、他の物語類と比較した結果、貫之においては、「を」「に」「ものから」「ものゆゑ」「ものを」等の情緒的逆接語の使用数に比べて「ど」「ども」という論理的逆接語の使用数がきわめて高いことを発見した。一方古代の法令の漢文を調べた結果、文学的漢文に比して、「雖」という逆接語が極めて多用されていることも発見した。この二つの帰結を結びつけて、さらに調査を進めてゆくと、そうした法令に接する機会が多かつたはずの官司階級に、貫之の散文と同様の傾向を発見して貫之の文の、主知的の巧みと、法令的漢文とが無関係でないことを立証せんとしたこと

がある。これなども先程の命題を具体的に裏付けることになると思う。先述の貫之の対比的発想は措辞の上では、対立する二つの内容を逆接の接続助詞でつなぐことにあらわれており、その逆接ということがまた、漢文の論理性に結果されるとすると、貫之の文の巧みさは、漢文に負っているといえるのである。永積安明氏は、方丈記が中国の記の文体につながるもので、その対句が異質なものの対立でなかつた所に、彼の精神的・思想的限界を指摘しつつも、きわめて緻密な論理性を獲得しえた点に価値を見出しておられるのは興味深い。少し脇道にそれたが、要するに漢文の明快な対比的修辭が、国文の措辞を著しく変質させると共に、向上させたことは疑いない。このことは上代から、明治、大正にいたるまで、随所に指摘することができる。したがって対立的契機に立つ、国語教育に占める漢文修辭法の地位はきわめて重大といわねばならない。

さてその対句・覺句は漢詩の歴史では、詩經・楚辭等に起源し、唐代にいたっては律詩に必ず用いなければならぬよう定式化され、固着した。散文では一足早く六朝の四、六駢文に、内容と遊離して、リズムの快感を目的とするようになって頽廢の様相を示す。古文の隆盛につれて、こうした傾向もすたれ、対句は「記」のジャンルの中に、新たな装いで登場する。そして、それは現実の動きを、きわめて適確に、リアルに展開する機能を獲得する。他の各種の古文にも対句は、多く見られるが、どれも、内容としての作者の心意を適確に展開する点で、前向きな発想に根ざしていたといえる。詩經と楚辭における対句は、こうした、作為的なリズムや論理性では律することのできない、異質な発想に根ざすのではないかと疑いが、おこるのだが、それは、詩經が、あるいは楚辭が民謡である限り、

当然おこる疑問といえる。詩経における「風」はさておいて、「雅」や「頌」が民謡であることに疑いをいだくむきもあるかもしれないが、「雅」については、我國の催馬楽・神楽歌が、くにぶりの歌を母胎としていたこと、「頌」については、祭祀が民族の民俗の基礎となり、深く結びついて分かち難いことを考えてみれば、このことは判然とするのである。

事與我國の民謡を見ても、今もって、リフレインは欠かせない契機なのである。それが、民俗学派の説くように、神憑きの狂乱の中に、神意を求めてたゆたうことに、起源するものなのか、歴史社会学派の説くように、労働の場における掛け声のものに起源するものなのか、にわかに即断できないが、少なくとも、詩経や楚辭の対句には、祭祀的なものや、共同体的なものに根ざす、幼なさと混沌が見られることは疑いない。

翻って、我が国古代の対句に目を向けてみると、最初は無意識に、あれかこれかと言ひ代えているうちに、意識的に言語を対偶したり、思想を幾通りか言いかえてみたりするようになり、ついには段々形式本位になって、無理に対偶を作るにいたる。その方向は一つには離し詞となる。これは主に民謡に見られる現象である。その二には寿詞に結実の場所を得るのである。こうした、とうとうたる形式化の流れの中で、つねに対句の中に内的緊張を盛り込むことに成功したものが外ならぬ麻呂の長歌であった。彼は対句を内容と深く結びつけて、生命あるものとしたばかりでなく、枕詞さえ、純粹譬喩として使用しえたのである。これを可能とさせたものは、彼の資質もさることながら、英雄時代の精神の高揚が強く彼を支えていたからであらう。それ以後の赤人・憶良らの長歌においては、

著しく形骸化して、ついには長歌の衰減と歩調をあわせるかのごとく和歌の世界から姿を消していったのである。以上、種々な対句や覺句を眺めてみたのであるが、要するに、くりかえしの修辭は、もつとも原初的なものであって、それだけに、発想における対立ということが、人間にとっていかに大切であったかということをいえる足るのである。そして、それを発生の契機において捉えるにしても、あるいは固定化したものとして捉えるにしても、要するに、対照・対称、対蹠といった対立を契機として、何らかの表現の効果を挙げようとする発想に、彼等が立っていた点だけは疑えないのである。個々の問題にあたっては、教授者・被教授者が一体となつて、こうした観点に立ちながら、創作主体の発想にまで、掘り下げのメスを加えてゆかなければならないのである。

漢文の修辭法に触れたついでに、漢詩の起承転結の技法に考察を及ぼしてみたい。起句・承句と転句の關係を仔細に点検してみると、心理的起伏というか、一種の内律を見出すのである。起承句が抽象的説明であれば、転句は必ず、具体的な自然描写となり、逆に起承が自然描写であれば転句は説明となる。そうした、理性と感性のせめぎあいのうちに、結句の中にテーマは止揚されるのである。そこに漢詩の微妙で、ダイナミックな味わいの秘密が潜んでいるのである。

(香川県立普通寺第一高等学校教諭)

(これにつづく)

(四) 修辭法以外の種々なる発想に見られる対立の諸相は、紙数のつごうで保留させていただきます。——編者)